クラウドナイン・クライマーズ・ネット（東京）
伊藤 忠男
http://www.angkorclimbers.net

20回目

# モイモイのモイ

（一歩一歩のたった一歩）

## 目指せ、アンコールクライマー誕生!!

### クライマー奨学金制度

サムコスから戻ると、いよいよ雨季特有のストームが次々にやってきた。慌ててAW（人工壁）のシートラップを強化した。街では、日本への支援活動としてチャリティコンサートなどが開かれていた。スムロンは、オリンピック委員会から、クライミングでも何かイベントをやったらどうかと言われた。僕らも、内戦からの復興に向かうカンボジアから、母国の東北へ、何か意味のあることを発信できるような気がした。

じつは4カ月前、僕らはささやかなトップロープのコンペをやっていた。いつも気楽にやってしまう「違うホールドを握ったら減点ではなく失格」。なぜ？

自然の岩場でそれがもし浮いた岩だったら、それは君の命に直結するミスだからだ。このメタファーは子供たちにある種のインパクトを与えた。彼らはそれまでより一層集中するようになった。そこで僕は、自然な流れとして、初めてのリードコンペの開催を提案したのだ。

6月前半に、コンペに出場を希望する生徒の家を廻ることにした。ちゃんと両親の同意と理解を得るためだ。その日の最初の訪問については他誌に書いた。2番目の訪問先について紹介しよう。何かと問題行動のある男子高校生M。彼の家は小さな寺院の裏路地をうねうね辿ったところにあった。何軒かが同じ敷地に寄り添っている。共用らしい大きなテーブルに座ると、ハエの群れを掻き分けて忽然と小さな父上が現れた。彼は奥さんの同意がないとなあ～と、てらいもなく言った。しばらくするとケバイ服装の大柄な若い女性がやってきたので、娘さん？と、聞くと、げらげら笑った。母上らしい。若い、っつうか、ケバイ。

今日はぜひともサインが欲しいと訴える、しかし、母上は名刺を出した。クメール語なのでぜんぜん読めない。スムロンに聞くと、彼女は富裕層相手のテーラーで働いていて、僕にフォーマルな服を買うように言ってるらしい。貴方はブルーよりもオレンジ系の背広（どういうんだよ？）が似合うわ。かくしてその日の1軒目と同じく、僕らはあっさりと奥の手を持ち出してしまった。〝家が貧しくクライミングへの意欲の高い子には教育費を援助する奨学金制度を考えて……〟と言い出した途端、小さな父上が大きな母上の有能な秘書みたいに、さらっとサインした。

で、初めてのリードコンペを、6月の最後の日曜日に実施した。競技の開始前に、みんなで日本の方を向き合掌した。ギャラリーのいない寂しいものだったけれど、その後の展開を思うと、記念すべきイベントだった。このあと、クライミングにも明確な競争原理があることを知った生徒たちは、目を瞠（みは）るような成長を遂げていくのだ。（続く）

大雨の日。ダブルフィッシャーノットを練習する中学生たち。

表彰式。ＣＣＦ事務局長スムロンから賞品を受け取る女子２位のダイ（14歳）。学校ではバスケットボール部のキャプテンだ。